

ハッとするよみもの

テクノロジー・リフレーミング

vol.2



ゲスト

村瀬 孝生

(よりあい代表)



対話者

山内 泰

(大牟田未来共創センター理事)



01

ダイアログ・レビュー

人間に寄り添うテクノロジーは、(事実ではなく)「実感」にフォーカスする!?

「ウェル・ビーイング」から「ビーイング・ウェル」へ。そこで問われているのは、人のありようから離れた理想に人をはめ込む技術ではなく、人の実相に根差した技術です。ではそれはどのようなもののでしょうか？そのヒントを村瀬さんとの話に見出すことができます。

「私たちのものさし」への問い

高齢者のケアで全国的に有名な「よりあい」。その現場で何より大切にしていることは「年寄りの実感の側に立つこと」だと村瀬さんは言います。「健常」で「普通」だと思っている私たちからすれば、認知症の高齢者のふるまいはおかしく見える。でもそれは私たちのものさしで一方的に評価しているに過ぎないと村瀬さんは問題視します。

「事実」を伝えても意味がない!?

具体的には次のような話です。あるおばあさんが「おしっこに行きたい」と訴えている。でもそのおばあさんがつけている膀胱センサーではおしっこは満ちていない。ここではセンサーが把握する「事実」とおばあさんの「実感」が対立しています。ここで科学の立場から「(タイミングを正しく捉えられない)おばあさんの間違い」を本人や支援者に指摘しても問題は解決しないと村瀬さんは言います。事実がどうかよりも「おしっこに行きたいという実感」こそが本人にとっては切実な問題だからです。

「おしっこ」から「しりとり」へ

だから村瀬さんたちにとっては「おしっこばかり気にしてしまうおばあさんとうどう関わるか?」という課題設定となります。そして試行錯誤から村瀬さんたちは、「おしっこ」を繰り返すおばあさんの発言から「しりとり」をはじめることになり、その結果しりとりで夢中になった本人がおしっこを忘れてしまうという痛快な状況に至るのでした。

テクノロジーを拓く問い

村瀬さんのアプローチは実感の側に立つことではじめて見出されるものです。事実と実感は必ずしも一致せず、事実を伝えるだけでは実感には響かない。何より人は実感において生きている。村瀬さんの実践は「科学的な客観的事実だけではなく、人間の实感にアプローチする技術とは何か?」を鋭く問いかけています。それはDXやUXが直面する問いでもあるでしょう。そしてそれはテクノロジーの可能性を新たに拓くものでもあるはずです。

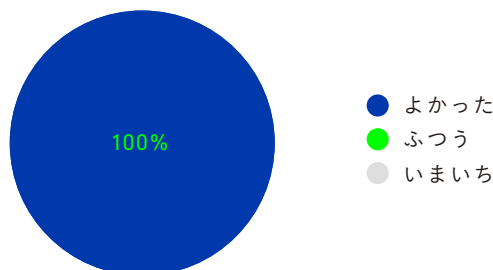
02

リサーチャー・ボイス

参加者の声

- お年寄りの話に限らず人間観に話が及び、考えさせられたのはよかったです。 有意義でした。同じシリーズもまた定期的にやってほしい。 (社ウP)
- 事実と実感で、実感にフォーカスするという考え方は目からうろこでした。 (NW 総研)
- 実際に高齢者と接して、葛藤していращやる立場からの貴重なご意見をいただけ
て勉強になった。 (人間研)
- 役割で行動を規定しないようにするという話を聞いてハンナ・アレントの「悪の凡庸さ」を思い出しました。役割などに引きずられて思考が簡略化するのは、介護の現場に限らずあることです。それが社会の仕組みのせいなのか人間の本能なのかわかりませんが、そういったものを技術で何とかできたらと思います。 (社会研)

本日のセミナーいかがでしたか？



イベント概要

シリーズ「その技術は人を幸せにするのか」

「超高齢社会」における技術を問う

日時:2021.7.19(月) 16:00~19:00 オンラインでの実施

ゲスト:村瀬 孝生 (よりあい代表)

よりあい代表。1964年、福岡県飯塚市生まれ。
東北福祉大学を卒業後、特別養護老人ホームに生活指導員として勤務。1996年から、「第2宅老所よりあい」所長を務める。2015年4月より特別養護老人ホーム「よりあいの森」施設長。著書に『ぼけてもいいよ』(西日本新聞社)、『看取りケアの作法』(雲母書房)、『おばあちゃんが、ぼけた。』(新曜社)など多数。

対話者:山内 泰 (大牟田未来共創センター理事)

一般社団法人大牟田未来共創センター(ポニポニ)理事、NPO法人ドネルモ代表理事、株式会社ふくしごと取締役。有識者との対談等の実績多数。その他、共創学会理事、大学講師(九州大学)など。「挫折のデザイン〜パーソンセンタードにおける新しい主体性」(『デザインに哲学は必要か』武蔵野美術大学出版,2019)、「ぐにやりのまちー超高齢社会」以後の地域経営モデル(Sustainable Smart City Partner Program, NTT, 2020)、「『わたしの役柄』が表現すること哲学者・國分功一郎さんとの対話から」(『精神看護』, Vol.23, No.4, 医学書院, 2020)等